



TITLE:

# 地理教材としての地形圖(二)京都 [近]傍

AUTHOR(S):

小川

---

CITATION:

小川. 地理教材としての地形圖(二)京都[近]傍. 地球 1924, 2(3): 440-443

ISSUE DATE:

1924-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182740>

RIGHT:

## 地理教材としての地形圖 (二) 京都近傍

京都及び奈良平地の地形といふ問題が今回の文部省中等教員檢定試験に出た際でもあるから、先づ京都近傍の地形圖に就いて地文及び人文上の説明を試みる。京都市の周圍を含む陸地測量部出版地形圖は前に述べた御大典の時に出版の色刷一萬分一の外に左の四種ある。

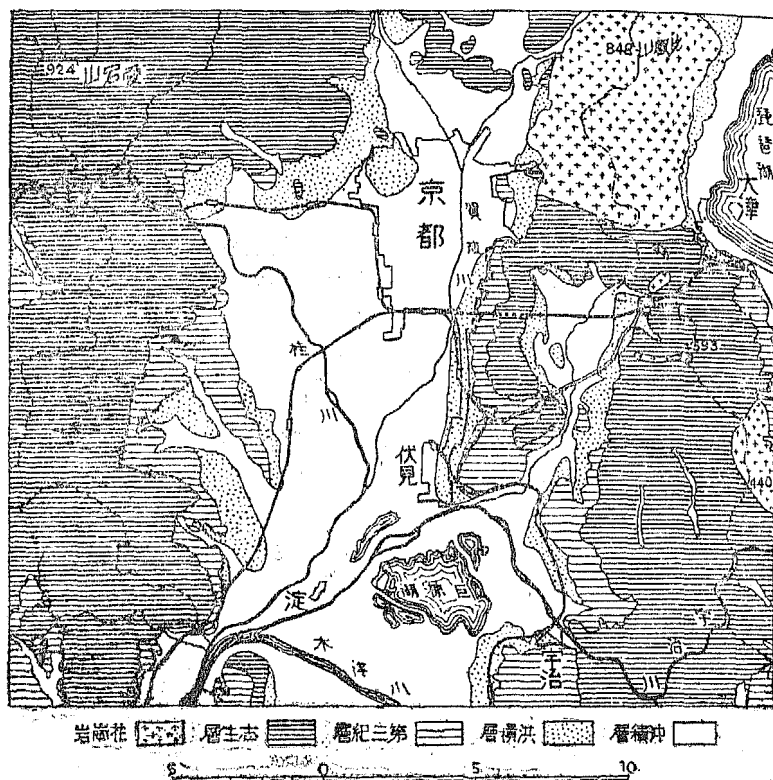
二萬分一 京都近傍二十八枚の内大原<sup>四</sup> 大津<sup>五</sup>  
 膳所<sup>六</sup> 宇治<sup>七</sup> 鞍馬<sup>八</sup> 京都北部<sup>一二</sup> 同南<sup>一三</sup>  
 淀<sup>一四</sup> 瀧之町<sup>一八</sup> 嵯峨<sup>一九</sup> 大原野<sup>二〇</sup>  
 山崎<sup>二一</sup>の十二枚

五萬分一 地形圖 京都市近郊圖一枚  
 南部、知井村、京都西北部、同西南部の枚六

二十萬分一 帝國圖、京都及大阪  
 此の地區の地貌を理會するには地質構造の概

要を知らねばならぬ。參考の爲めに茲に鈴木(敏)博士の調査に係る二萬分一京都近傍地質圖を略して載せたが、是は京都に内國博覽會を開催した時に地質調査所から出品した手塗りの地質圖で、終に出版されずして、今も其の原圖が第三高等學校に保存され、近畿地方の詳細な地質圖の模範となつてゐるものである。

基盤を成す岩層は古生層と之を貫いて噴出した花崗岩で、概ね西々北東々南の走向をもつて褶曲し、比叡山の西側の花崗岩に接する部分だけ東々北に轉するらしい。中生代の岩層は全く缺如し、第三紀の末期に屬する泥、砂、礫等の堆積層及び現在の溪谷から排出された堆積物の扇狀地及び臺地(地圖に洪積層として示すもの)等が遙かに後れて此の古い岩層の凹地に堆積し、最後に現在の賀茂川桂川宇治川等の運搬す



る土沙の堆積した沖積平地が出来たのである。

凹凸の大勢は此の地質圖と地形圖とを比較すれば一目に瞭然たる如く、古期岩層が山地を成し、東山の清水坂や、桃山の丘陵及び臺地の如き處は第三紀以後の湖底の堆積層から出来た稍高い處で、沖積層で舊湖底の凹部は大抵埋没せられ、今は巨椋の池のみに其の名残りを留めてゐるに過ぎぬ。

然れども試に吉田山（京都大學の東）の丘上から北及び西を眺望すれば、丹波高原と我々の呼ぶ山地は最高點が略ぼ六七百米の海拔に過ぎずして、山頂を連ねた地平線は著しい高低を成さぬ。稀に愛宕山の如く突起した瘤を認めるが、それは硅岩の浸蝕作用に對す

る抵抗力の大きいので、残つた孤立峯 *monad-*  
*ry* である。又た比叡山の四明ヶ嶽と如意ヶ  
嶽との中間に著しく低い一帯があるのも花崗岩  
の山が盛んに浸蝕されて、其の兩側の古生層が  
接觸によつて硬化してホルンフェルスと成つた  
ものが聳立し、大文字の部分や將門岩の如き突  
起を維持しつゝある。此の花崗岩の風化と浸蝕  
によつて出來た土沙を排出する白河は平地に出  
る處に扇狀沖積地を生じ、地質圖には洪積層と  
して示してゐる。

此の二つの場合を考ふるに前者即ち愛宕山の  
場合は過去の准平原の一部で、洪積世に入る前  
後に更に隆起し初めて、桂川上流の保津川は元  
の鈍いU字形の底部を成した處が若返つて流水  
浸蝕の威力を發揮し、今尚ほカニヨンの如き峽  
流を成して、嵐峽の風景を添へたのである。之  
に反して白河の溪谷は岩石の性質が風化し易い  
爲めに地盤の隆起と同時に進行はるゝ浸蝕作用の  
進行急激で、全く異つた浸蝕輪廻の餘程進んだ  
場合に見る地貌を呈し、溪流の網目は非常に密

になつてゐる。

此の如く岩層の性質によつて地貌に著しい相  
違がある外に、平地其ものゝ成因が重大な問題  
であるのは勿論で、古生層の層序層位を詳細に  
見るまでもなく、茲に示した地質圖だけで考へ  
ても略ぼ認められるのは地層走向に並走、斜走  
又は横斷する拆裂があつて、其の或ものは著し  
い斷層と成つて地盤の陷没を生じてゐること  
である。其の横斷するもの最も著しく、比叡、醍  
醐、東山と其の中間の山科盆地の如く、地壘と  
地溝の關係を明かに示し、京都平地其ものゝ更  
に大きな地溝で遠く奈良平地に連つてゐる。此  
の子午拆裂線の地震との關係は本誌第三號（二  
〇二—四頁）に述べた通りである。又た縱走斷  
層の著しいのは鞍馬山の南の市原岩倉の盆地の  
南を限る古生層の邱陵の南邊を走るもので、宛  
かも東山が一段低い子午地壘を成す如く、松ヶ  
崎の邱陵も京都平地との間に小なる卯酉地壘を  
成してゐる譯である。

京都平地の人文地理學上の考察は之を簡單に

述べ難いが、最も著しい一として白河扇狀地が先づ人類の居住地となつた事實を挙げねばならぬ。山崎博士が嘗て第三高等學校學生時代に石器を校内で發見され、近頃農學部の土工に當つて石斧が發掘され、尙ほまた祝部土器も出るこゝが確められた。換言すれば今の白河聚落が原史先史の時代を通じて居住に最も適當な地點として選ばれたのである。是は平地に諸川が亂流してまだ賀茂や出雲の神々の代表する部落が低地に安住し得ぬ狀態を想はしむるもので、遙かに後に秦氏などの外來民族が移住し來つて今の高野平野稻荷等の神々の代表する部落が出來たのである。喜田博士に従へば今の平安京奠都は此處を開墾して偉大な財力を蓄積した秦氏のあつたので出來たといはれる。今の京都は此の如くして一千年間の帝都となつたが、奈良から遷都の必要は如何なる一時的理由があつたとしても、其の永續したのは主として淀川の河運の便と三條栗田口から逢阪山を越えて直に天津に出る湖上の水運を利用し得るの便とがあるもので、

奈良朝頃に非常に開發された東海東山北陸の地方への交通の要地となつたからであらう。秀吉が伏見城を築いたのも同じ理由で、最近東海山陰兩線の分岐點となつて一層此の交通上の意義が明かとなつた。

次に市街の形狀が規則正しく東西南北の格子目を成すのが奈良平安兩朝の間に隋唐の交通盛んで大陸文化を輸入し、都市計畫といふ最近喧ましくなつた問題を當時奠都の時に極めて容易に實行した結果たるはいふまでもなく、二條三條等の町名に其の系統の一部が残つてるので明かである。尤も當時の計畫も今の市街地たる左京のみが出來たに止り、右京は終に完成せず、其後鴨川兩岸が開けて現狀に發達した。

京都市街地の地圖上に現はれた最も著しい特色は大陸文化の影響である點であつて、三大都市中最も創立の古いだけに、化石した文化を認め、而かもそれが最近の都市計畫に極めて便利な形狀を成し、歐米の都市と趣を一にしてゐる。(小川)